

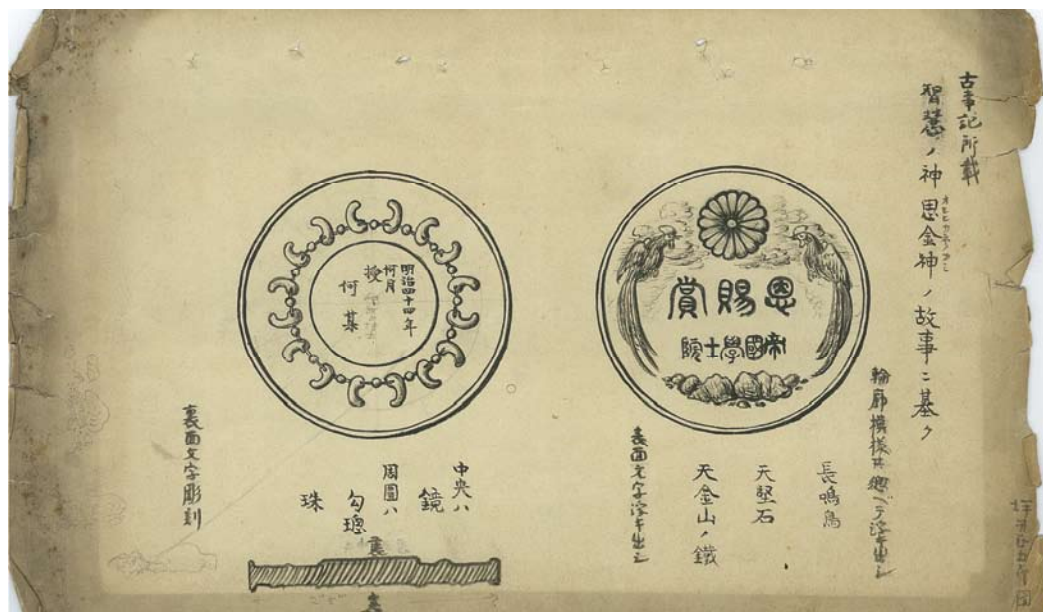


日本学士院ニュースレター

明六社だより

トピックス：

- 第100回日本学士院賞受賞者から寄稿いただきました
- 秋の公開講演会を開催します
- 第5回日韓学術フォーラムを開催しました
- 新客員4名を選定しました



(恩賜賞賞牌図案) 恩賜賞賞牌のデザインは、人類学者・考古学者の坪井正五郎会員が「古事記」の智慧の神・思金神(おもいかねのかみ)の神話に基づいて考案した案が採用されました。天の岩戸に隠れた天照大神を外に出すために、思金神が八百万の神々の協力を得て、常世の長鳴鳥(ながなきどり)を鳴かせて朝を告げ、天照大神に外の様子を覗かせて天堅石を取らせたという神話です。

賞牌の表面上方には菊花御紋章を現し、雲を添え、中央には恩賜賞の三字、その左右に長鳴鳥を配し、その下に帝国学士院の文字と天堅石と鉄を現しています。雲と石に天地の意を、鳥と鉄に生物・無生物の意を寓し、表面の装飾は総じて自然界を意味しているとされます。裏面の中央は鏡の形で、受賞者氏名と受賞年が記されています。その周囲の玉類を糸で繋いだ形は人類思慮の結果を意味しています。鏡と玉は、世を照らし思想界を装うと見ることもできます。(現在の日本学士院賞賞牌は5ページ)

目次：

第100回日本学士院賞授賞式	2	外国アカデミー等との交流	12
講演会レポート	5	新客員の選定	12
第5回日韓学術フォーラム	6	総会における論文報告・談話	13
第53回公開講演会のお知らせ	8	会員寄稿	14
その他の講演会等のお知らせ	9	会館施設の利用案内	15
所蔵資料の紹介(先哲遺墨)	10	会員の逝去	16
		編集後記	16

第100回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院第100回授賞式を平成22年6月21日(月)に日本学士院会館(東京・上野公園)で挙行了しました。本年の授賞は、恩賜賞・日本学士院賞2件、日本学士院賞7件、隔年で授賞する日本学士院エジンバラ公賞1件、計10件12名でした。

－恩賜賞・日本学士院賞－

表 章 (法政大学名誉教授)
山中 伸弥 (京都大学iPS細胞研究所所長)

－日本学士院賞－

梅原 郁 ((財)黒川古文化研究所所長、京都大学名誉教授)
斎藤 修 (英国ケンブリッジ大学リーヴァーヒューム客員教授、一橋大学名誉教授)
黒岩 常祥 (立教大学大学院理学研究科特任教授、東京大学名誉教授)
佐藤 勝彦 (大学共同利用機関法人自然科学研究機構機構長、東京大学名誉教授)
村井 眞二 (奈良先端科学技術大学院大学理事・副学長、大阪大学名誉教授)
村橋 俊一 (岡山理科大学客員教授、大阪大学名誉教授)
大類 洋 (横浜薬科大学薬学部教授、東北大学名誉教授)
北原 武 (帝京平成大学薬学部教授、北里大学客員教授、東京大学名誉教授)
田中 啓二 ((財)東京都医学研究機構東京都臨床医学総合研究所所長代行)

－日本学士院エジンバラ公賞－

西平 守孝 ((財)海洋博覧会記念公園管理財団参与、名桜大学客員教授、東北大学名誉教授、名桜大学名誉教授)



両陛下をお迎えする受賞者



授賞式の様子



第100回受賞者と文部科学大臣、日本学士院役員

授賞理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>

受賞者から…授賞式を終えての思い！！



両陛下に研究内容を御説明する山中受賞者

〈恩賜賞・日本学士院賞を受賞して〉

山中 伸弥

この度、日本で最も権威ある学術賞である恩賜賞および日本学士院賞を、第100回目を迎えた年に受賞いたしましたことは、科学者として、まさに身に余る光栄と喜びであります。授賞式の日、過去に受賞された、もしくは今年度と同時に受賞された錚々たる先生方とお会いしました時、私のような若輩者が受賞の栄誉に浴しましたことに対する責任の重さをひしひしと感じました。今後の人生において、諸先生方の歩まれた道をお手本にし、賞の名に恥じぬよう、一層精進することを改めて決意いたしました。

授賞式におきましては、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、さらには天皇陛下からお言葉を頂きました。お言葉の中で、日本学士院賞が、先の大戦中においても、また占領下の混乱期におい

ても一度も中断することなく、100年間の長きにわたり脈々と続いてきたことを知りました。我が国における学術研究を牽引されてきた諸先輩の不断のご努力を思い、身の引き締まる思いがしました。今後、この伝統を守るため、微力ながら全力を尽くす所存であります。

受賞の対象となりましたiPS細胞（人工多能性幹細胞）研究は、疾患の原因解明、新薬の開発、そして再生医療などにおいて応用が期待されています。まだ萌芽期にあるiPS細胞が、真に人の役に立つ技術として発展するよう、これから研究活動に邁進いたします。

最後になりましたが、いつも私を支えていただいている多くの方々、友人、そして家族に、この場をお借りして深謝いたします。



イギリス大使らと挨拶を交わす西平受賞者

〈日本学士院エジンバラ公賞を受賞して〉

西平 守孝

このたび日本学士院エジンバラ公賞を頂き、とても光栄に思っています。授賞は「沖縄を中心とした我が国のサンゴ礁の形成と保全の研究」に対するもので、多種共存機構として「棲み込み連鎖」理論を提案して新たな群集観を示したことや、市民も取り組めるサンゴ礁の保全の啓発活動などを行ったことなどが、評価されたとのことでした。

私は、生態分布や群集の成り立ちに興味があり、もっぱら野外の調査や観察を続けてきました。どのような場所にどのような生物がいかほどいて、何をしているか。どのような筋道でその状況ができて上がり、維持され、変化するか、というようなことを、特定の対象に限ることなく観てきました。多様な環境における野外観察から、生物による棲息場所形成と生物の棲み込み関係を軸に

「棲み込み連鎖」の考えができあがりました。

新しい視点を提示したとしても、自然で起こっていることは、解ってしまえばいわば普通のことですから、私がこの賞に値するかという不安もありますが、この受賞をさらなる宿題が私に与えられたものと考えて、これまで援助を頂いた多くの方々に感謝しつつ、体力が許す限り励んで行きたいと気を引き締めています。

昨今の地球環境の変化に伴って、サンゴ礁生物群集の荒廃が強く危惧されますが、この考え方を基礎にした保全への展開と市民レベルの環境保全活動を援助するような形で、少しでも社会に役立てて行きたいと気を引き締めているところです。



今回は明治44年に第1回授賞式が挙行されて以来、第100回の節目となりました。第100回授賞式を迎えるにあたり天皇陛下よりおことばをいただきました。また、記念行事として、式前の時間を利用して「授賞100周年記念講演」、式後は「受賞者祝賀・授賞100周年記念パーティー」が行われました。

「授賞100周年記念講演」では、星野英一第一部部長が「日本学士院の授賞事業」というテーマで日本学士院の沿革や授賞制度の歴史について講演を行いました。続いて、古在由秀第二部部長が「第1回



受賞者木村 榮博士の業績など」というテーマで木村博士の「地軸変動研究特にZ項の発見」などについて講演を行いました。

「受賞者祝賀・授賞100周年記念パーティー」は、日本学士院地階食堂で開催され、久保正彰院長の開会挨拶、山中伸弥受賞者代表挨拶と行われ、野依良治会員、根岸 隆会員、江崎玲於奈会員が歴代受賞者を代表して挨拶し、例年よりも多くの出席をいただき、盛会裡に終わりました。

日本学士院賞100周年記念切手の発行について

日本学士院の授賞制度が明治43年(1910)に創設され、100年を迎えることを記念して、郵便事業株式会社より、特殊切手「日本学士院賞100周年記念」及び「ハードカバー切手帳(日本学士院賞100周年記念)」が発行されました。6月7日より全国の郵便局及び郵便事業株式会社支店等で販売中です。

ー「日本学士院賞100周年記念」ー

価格: 800円(80円郵便切手×10枚)

ー「ハードカバー切手帳(日本学士院賞100周年記念)」ー

価格: 1500円

詳細は日本郵便のホームページを御覧ください。

http://www.post.japanpost.jp/kitte_hagaki/stamp/tokusyu/2010/h220607_t.html



講演会レポート

第52回公開講演会

日時 平成22年5月29日

場所 大谷大学響流館メディアホール(京都市)



講演する外村会員



講演する上田会員

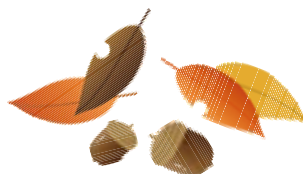
平成22年5月29日(土)に日本学士院第52回公開講演会を、大谷大学の共催の下、同大学響流館(こうらん)メディアホールにおいて開催いたしました。

講師の外村 彰会員は「電子で見るミクロの世界」と題し、上田閑照会員は「世界における「無の思想」—西田幾多郎、鈴木大拙、西谷啓治—」と題してそれぞれ講演を行いました。

外村会員は、電子が不思議な性質を見せるミクロの世界について、映像等をふんだんに使い、わかりやすく解説しました。また、今現在計画されている最新の研究についても紹介を行いました。聴講者からは、「全くの専門外の話だったが非常にわかりやすく、楽しく聞けた。」「日本の技術の高さを知った。」等の感想が多く寄せられ好評を博しました。

上田会員は、「無」の思想について、地元京都にゆかりのある3人の大哲学者の思想・思索に沿って、講演を行いました。上田会員は会場となった大谷大学でも教鞭をとったことがあり、上田会員の講演を生で聴こうと多くの学生が詰めかけました。聴講者からは「時間が短く残念だった。」「もっと聞きたかった。」等の声が聞かれ、講演終了後には熱心に質問をする姿も見られました。

13時30分に開会された本講演会は17時に全ての日程を無事終了し、盛会の裡に幕を下ろしました。



<< 日本学士院賞賞牌・賞牌箱

現在の日本学士院賞賞牌であるが、デザインは第1回授賞当時から大きくは変わっていない。

賞牌の材質は四分一といわれる、銅3に銀1を混ぜた日本特有の合金で、暗褐色で特殊な光沢もっている。

第5回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業である第5回日韓学術フォーラムは、平成22年9月28日(火)～30日(木)に東京において開催されました。今回は大韓民国学術院から多くの会員が参加し、本院会員等を合わせて60名余の出席者を得ました。

大韓民国学術院会員は、初日に東京国立博物館での観覧後、本院を訪問し、役員や関係会員と和やかに懇談されました。



日本学士院表敬訪問



フォーラム風景

刑事裁判と国民参加（抜粋）

日本学士院会員 松尾浩也

大韓民国では、2008年1月から国民参与裁判法が施行されているが、やや遅れて日本では、2009年5月から同種の制度、すなわち裁判員制度が実施されている。

裁判員の参加する裁判を傍聴してみると、裁判官だけによる従来の裁判と大きく変わったことがわかる。公判は連日開廷され、審理は証人尋問を中心に行われている。しかし、ここに至るまでには、多年にわたる苦闘の歴史があった。

裁判員法は、2009年5月から施行されている。実施状況は、今のところ順調である。裁判員候補者の出頭率は高く、選定された裁判員は、積極的に職責を果たしている。韓国の国民参与法と日本の裁判員法とは、共通する点も多いが、異なる事項もある。また、実施の状況についても、大局的には似ているが、細かい点では違いも見受けられる。

裁判員法は、施行から3年後に検討を加えるという「見直し条項」が付いており、国民参与裁判法の実施状況は、裁判員法見直しの際に重要な参考資料の一つとなるに違いない。日韓フォーラムのテーマとして頂いたことを有り難く思う次第である。



講演する陳徳奎会員



講演する松尾会員

韓国の土壌資源の調査・分類及び土壌情報体系（抜粋）

大韓民国学術院会員 柳順昊



講演する柳会員



講演する入谷明会員

土壌は植物育成の培地であるだけでなく、各種生物の棲み処であり、建築構造物の基盤であると共に土壌－大気－水の連続系の中心として水と大気の行動を調節し、環境を浄化する等の機能を行う重要な資源である。

土壌は岩石の風化の産物である母材が各種影響因子の作用を受けて今日の土壌に分化発達したもので、地域によって性質が異なる。従って、土壌資源を効率的に利用し、合理的に管理するためには土壌の種類と分布を把握して種類別の特性を分析する調査が先に行わなければならない。

韓国は終戦後、6. 25戦乱、国家財政等の問題により、1960年代中盤になってやっと本格的な土壌調査事業に着手できた。この事業は国策事業として農村振興庁の土壌担当部署が主管

して全国の土壌を対象に実施した。40年以上の間続けられたこの事業により、全国の土壌を細密に調査・分析し、土壌を体系的に分類して土壌図を発刊し、土壌資料を電算化することによって一般人もインターネットを通して簡単に土壌情報に接することができるように土壌情報体系(soil information system)を構築してウェブサービスをしている。

この発表では終戦後に実施された土壌調査事業の内容、韓国の土壌の分類、土壌情報体系の活用について紹介している。



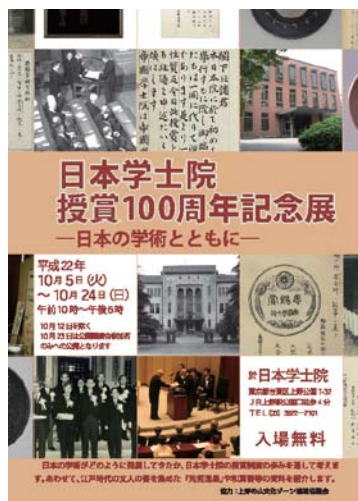
日本学士院会館議場にて

その他の講演会等のお知らせ

平成22年10月以降に本院で開催を予定している講演会等をお知らせします。

日本学士院授賞100周年記念展 ―日本の学術とともに―

平成22年10月5日(火)～10月24日(日)午前10時～午後6時
(※10月12日、23日を除く)



日本学士院授賞100周年記念展 ―日本の学術とともに―

日本学士院は、学術上功績顕著な業績を挙げた研究者に対し恩賜賞、日本学士院賞等の授賞を行っています。授賞式は明治44(1911)年以来、毎年、戦時中も含め1回も欠かさず行われ、平成22(2010)年6月に第100回を迎えました。この間の受賞者は、延べ800名を超えます。昭和24(1949)年以降の授賞式には天皇陛下、平成2(1990)年以降は天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いでいます。

本展ではこれを記念し、授賞制度創設当時の資料、第1回授賞式における挨拶文(草稿)や祝辞等の関係資料、過去の授賞式に関する新聞記事・写真等を展示し、日本学士院の授賞制度の歩みを通して日本の学術がどのように発展してきたかを考えます。

日本学士院学びのススメシリーズ

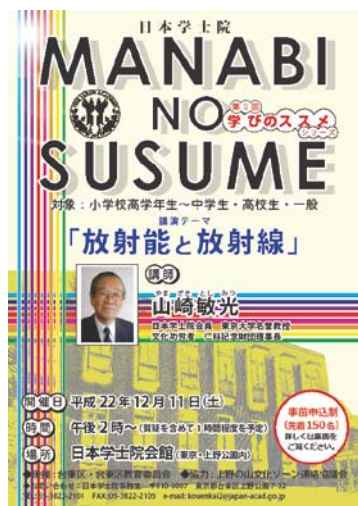
講演テーマ「放射能と放射線」

平成22年12月11日(土)午後2時～

「放射能と放射線」

日本学士院会員 山崎敏光

皆さんの周りには目に見えない放射線がたくさんあります。不安定な原子核は放射能をもち、アルファ線、ベータ線、ガンマ線という放射線を発生します。レントゲン写真で体の診断ができるのも、X線という放射線のおかげです。また、宇宙から地球に降り注いでいる宇宙線という放射線もあります。その中には、湯川秀樹博士の予言した中間子と関連するミュー粒子と呼ばれる変わり者の粒子があります。目には見えない放射線を目で見えるように、実験装置を用いて観測してみましょう。放射線は自然科学の研究にはなくてはならない手段です。また、その応用として医学にまで使われています。そのように大活躍している放射能と放射線について、いくつかの実例を交えてお話ししましょう。



お問い合わせ先 日本学士院 事務室
〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32
TEL:03-3822-2101 FAX:03-3822-2105

E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp Web: <http://www.japan-acad.go.jp/>

所蔵資料の紹介（先哲遺墨）

「先哲遺墨」は、江戸時代の学者文人等の遺墨を集めたもので、明治25年（1892）、本院会員の西周により寄贈された。

この「先哲遺墨」は、西周みずからの発意と蒐集とによって作らせ、愛蔵した書帖である。

寄贈した意図は、個人のコレクションとするよりも博学の士の研究のために供してほしいという高い見識からであった。そして、東京学士会院（日本学士院の前身）では、会員だけの資料とするのではなく、多くの学者等に利用してもらうために明治25年12月に帝国博物館（現：東京国立博物館）に寄託出品することとなった。

昭和54年、日本学士院創立100周年の事業の一つとして行われた展示会でも展示され、東京国立博物館では、平成19年の常設展で展示されるなど、一般への公開も行われている。今回、10月5日（火）～24日（日）まで開催する「日本学士院授賞100周年記念展」でも展示される。

「先哲遺墨」は、折本仕立て、表装が薄茶地柳文金入鍛子、表紙中央に題簽（だいせん）、全3帖である。

上・中・下からなる「先哲遺墨」の題字は、西周が専門や地位等を考慮し適任者を選んで、上：細川潤次郎、中：重野安繹、下：島田重禮にお願いした。

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

第6回は東京国立博物館に寄託している「先哲遺墨」です。

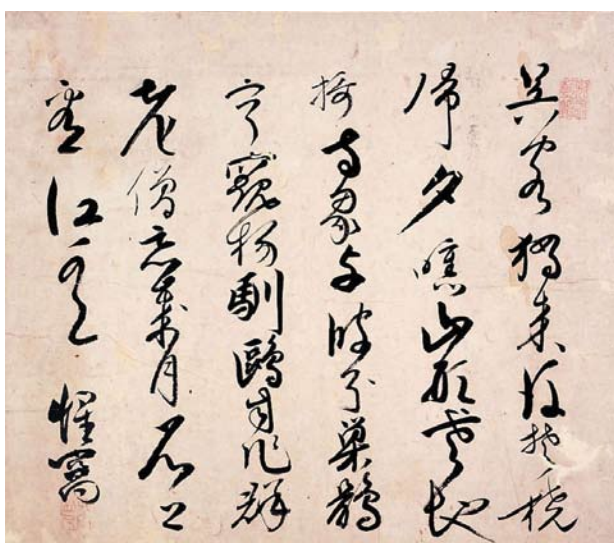
《所蔵資料》

—先哲遺墨— 上・中・下 全3帖（計270点）

（上）縦：45.4cm、横：60.7cm、高さ：20.7cm

（中）縦：45.4cm、横：60.5cm、高さ：20cm

（下）縦：45.4cm、横：60.5cm、高さ：21cm

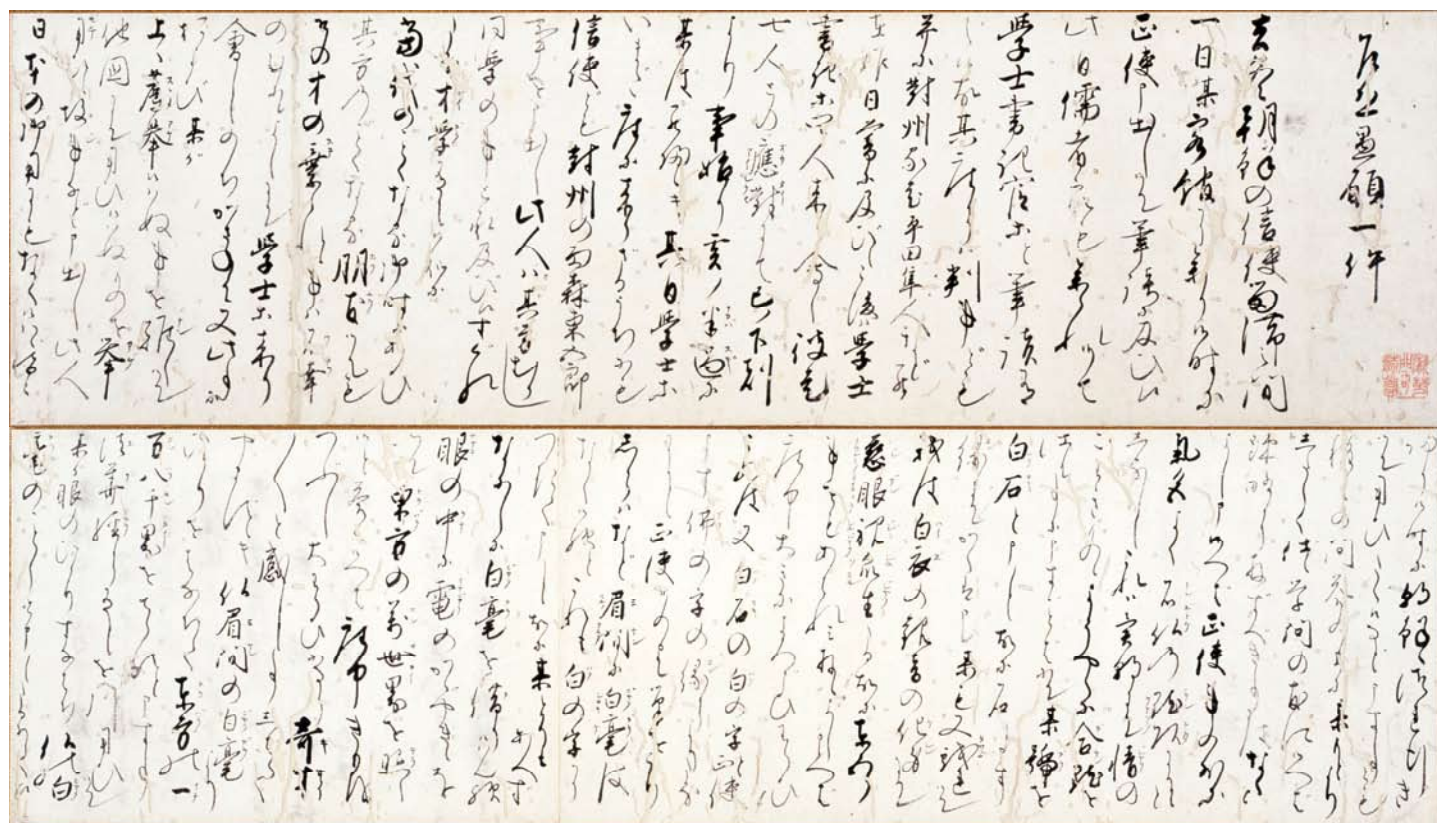


▲藤原惺窩（1561－1619） 五言律詩
近世初期の儒学者。冷泉家の所領である播磨国（兵庫）の出身で、京都の相国寺で儒学を修めた。林羅山など多くの門弟があり、近世儒学の祖といわれる。

▼石川丈山（1583－1672） 四言古詩

江戸初期の武人・詩人。三河国（愛知）の出身で、本多正信および正重の甥に当たり、徳川氏譜代の臣である。藤原惺窩に師事し、朱子学を研鑽した。

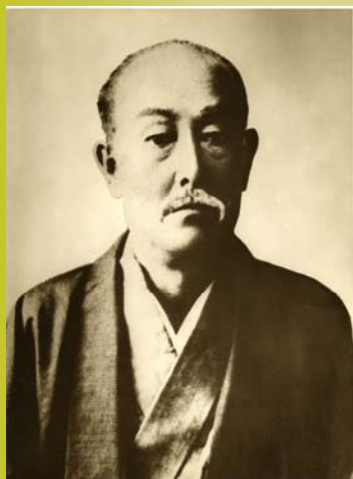




▲新井白石(1657-1725) 上書稿

江戸中世の儒学者・詩人。江戸に生まれ、徳川六代将軍綱豊(のちに家宣と改名)、その子、七代将軍家継の時代にかけて「正徳の治」を実現するなど活躍した。

西周〔にしあまね〕 (1829-1897)



西周は、石見国津和野藩(現、島根県津和野町)の生まれで、江戸時代後期の幕末から明治初期の啓蒙思想家・教育者である。

1857年、蕃書調所教授手伝。1867年、津田眞道、榎本武揚らとともにオランダ留学し、法学、カント哲学、経済学、国際法などを学ぶ。1865年、帰国して開成所教授職。

大政奉還(1867年)前後において、将軍徳川慶喜の政治顧問を務め、『議題草案』(大政奉還後の政治体制作案)を起草するなど幕末維新の時代に大きな活躍をする。1868年、幕府の沼津兵学校初代校長に就任、1870年、明治政府の兵部省に入り、以後文部省、宮内省などの官僚を歴任。

1873年(明治6)森有禮・福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・津田眞道・箕作秋坪・杉亨二らとともに「明六社」を結成。その後、1879年、東京学士会院を創設。創設時の会員は、西周・福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・津田眞道・箕作秋坪・神田孝平である。東京学士会院では、第2代、4代と会長を務めた。

外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、9カ国10機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。

	区分・相手先	会 員 等 氏 名	期 間
受入	International Agency for Research on Cancer	Ruggero Montesano 博士	22.2.22
	日本国際賞受賞者	岩崎俊一 会員 Peter Vitousek 博士	22.4.20
	UAI事業関係 (日露関係史料をめぐる 国際研究集会)	Alexander Sokolov 博士 Sergey Chernyavskiy 博士 Vadim Klimov 博士 Alexander Sinitsyn 博士	22.5.24
	英国学士院	Geoffrey Parker 教授	22.7.8～7.30
	第5回日韓学術フォーラム	朴煥植副会長、車河淳、吳鳳國、 陳德奎、柳順昊、金榮漢、李成珪、 金鍾源、金弘宇、河斗鳳、金顯旭 (会員)、禹承求(事務局長)、 朴玉蘭、尹ハンスル(事務官)	22.9.28～9.30
派遣	中国科学院	朱作言、白以龍、陳運泰、顧逸東 (院士)	22.9.21
	国際学士院連合第84回 総会(ブタペスト)	青柳正規 会員	22.5.23～5.30



ロシア人研究者との懇談



英国学士院 Geoffrey Parker
教授との懇談会

新客員の選定

平成21年11月12日開催の第1033回総会において、Keith Thomas氏を、また、平成22年2月12日開催の第1036回総会において、楊振寧氏、Elias James Corey氏を、9月13日開催の第1041回総会において、William. Theodore de Bary氏を日本学士院客員に選定しました。

選定理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>



キース・トマス 氏

専攻学科目 英国近代史

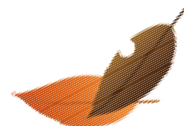
現職等 前英国学士院長、
前オックスフォード大学コーパス・クリスティ学寮長



楊 振寧 博士

専攻学科目 理論物理学

現職等 清華大学教授





イライアス・J・コーリー 博士

専攻学科目 有機合成化学

現職等 ハーバード大学教授、ケンブリッジ大学教授



ウィリアム・セオドア・ドウ・バリ 博士

専攻学科目 儒教哲学、日本思想史

現職等 コロンビア大学John Mitchell Mason Professor

総会における論文報告・談話

総会では、第1部(人文科学部門)は会員が論文を提出、第2部(自然科学部門)では会員の論文や談話とともに学術上優れた外部研究者の論文が紹介されます。以下は、最近提出された会員の論文・談話です。

総会	部	題 目	提出(担当)者
1038回	第1部	デイドロ、ダランベール編『百科全書』—知識の収集と破碎—(合同談話会)	中 川 久 定
		個別労働紛争の増加と紛争解決制度の課題	菅 野 和 夫
1039回	第1部	屏風絵と金(承前)	武 田 恒 夫
		地球温暖化と持続可能な経済発展	宇 澤 弘 文
	第2部	「海岸工学」—発展過程と現況(談話)	堀 川 清 司
1040回	第1部	成年年齢の引下げ ベーシックインカムの思想と理論	星 野 英 一 伊 藤 誠
	第2部	愛知用水事業完成50周年を迎えて—本事業の建設に駆使された科学技術的事項の回顧、検討—(談話)	沢 田 敏 男
1041回	第1部	日記文学の読みかた	秋 山 虔
		ポツダム宣言—誰が、何を、いつ、いかに、なぜ起草したか	三谷 太一郎

(会員寄稿) インド辺境と人類学調査

近年、世界のニュースで注目されている問題のひとつは、辺境地域における、政治的要素を内包する民族問題であろう。アフガニスタン・パキスタンの辺境やチベット問題などは、よく報道されているところであるが、そのほかにもさまざまな地域紛争が続発している。その大きな原因は、人口増加と急激な開発によって、辺境の民族にとって外部との接触が増大し、民族意識がいやが上にも醸成され、それが内外からの政治的干渉に触発されて、多くの場合、解決の難しい地域紛争に発展していることである。

これら辺境の諸民族の多くは1950年代までは、一般によく知られていなかった。私は1950年代前半にインド東北のアッサム地方の山岳地帯で人類学調査をして過ごしたが、当時はこの地帯は一般のインド人(ヒンドゥ教徒たち)からみると危険地帯とされていて、奥地に行こうとすると、政府の出先機関の役人に‘行くことには反対しないが、貴女の生命の保証はできません’と言われたものである。その地方の部族たちのことがよく知られていなく、何が起こるか想定できない、ということなのである。人類学の研究者にとっては、それだからこそ、‘行きたい’わけなのだが。

そこで私がとった方法は次の如くである。まず、その地域の入口に当たる所には必ず大きなバザールがあり、そこでは奥地からやってくる部族民などもよく見かける。そのバザールで私は2~3日かけて私と一緒に奥地に行ってくれる通訳(ある程度英語のわかる)とポーターを捜すと、自薦、他薦の何人かが見つかり、私の目的とする集落の方向にある地区出身者の中から最も信頼できるとされる者をえらんで出かけたのである。その者の出身村に着き、次の地点に親類のある者をえらんで更に進むという具合で、リレー式に確実な人間関係を伝いながら奥地に入って行ったのである。この地域の中にはかつて首狩族と言われた精悍な部族もいる

が、彼らからみると、私が女性であるために、用心することなく相談にのってくれたようである。特に村の有力者の母親であるおばあさんの意見は重要なものであった。

この地域はまた野生の象や虎の出没地帯で危険なのであるが、その点については、野獣たちの動きまわる時間帯(早朝、夕暮れから夜)をさけて、次の村に行き着けるようにし、また、マシーターと呼ばれる傷をおった虎はとくに危険で、村人は高い樹の上に見張りをおいていて、その辺を通ると、今マシーターは××の方角にいるから、こちらの方に行くようにと警告してくれる。

一旦彼らの組織の中に入ってしまう、ともにお酒など飲んで話し合うと、みな親切で陽気で、危険とか不安といったものは殆ど感じることはなかった。それでも、いざ出発となると、全く未知の土地に行くので、今度は無事に帰れるかな、という一抹の危惧を抱いたこともたしかであった。しかし、これは辺境の社会が外から予期せぬ政情不安や軍の介入などの心配がない、よき時代のことであり、今日思い出すとなつかしい感じがするものである。



中根 千枝 会員
(第1部第1分科)

大正15年、東京都生まれ

東京大学卒業。東京大学東洋文化研究所助教授、教授を経て、昭和55年東京大学東洋文化研究所長。昭和63年帝京大学文学部教授。平成14年東京女学館大学学長。東京大学名誉教授。平成5年文化功労者。平成10年勲二等宝冠章。平成13年文化勲章。

平成7年12月から日本学士院会員



「野獣の生息する奥地を行く、手前は私のポーター2人」
(インド東北、アッサム地方、1950年代)

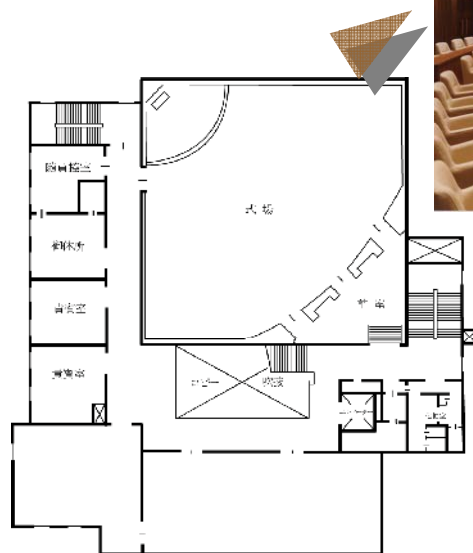
会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

(平成22年4月以降の会館利用状況)

利用年月日	利 用 目 的 ・ 内 容
平成22年11月19日	第10回山崎貞一賞贈呈式
平成22年12月 6日	国際生物学賞授賞式



誌名の「明六社」とは・・・

明六社(めいろくしゃ)は、明治6年7月にアメリカから帰国した森有禮(もりありのり)が、後の東京学士会院会員となる福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・西周(にしあまね)・津田真道・箕作秋坪・杉亨二らとともに啓蒙活動を目的として結成した、日本で最初の近代的啓蒙学術団体です。

名称の由来は明治6年結成からきており、毎月2回(1日と16日)に会合を開くほか、『明六雑誌』を発刊しました。また、我が国の公開講演会は明六社をもって嚆矢とされています。

その後、明六社は明六会となり、東京学士会院、帝国学士院を経て、日本学士院へと至る流れの先駆となっています。

会員の逝去

平成22年4月以降、以下の方々が逝去されました。

<会 員>

山崎一雄 会員	(第4分科)	平成22年4月10日	享年99歳
辻村公一 会員	(第1分科)	平成22年5月28日	享年88歳
小林 昇 会員	(第3分科)	平成22年6月 3日	享年93歳
森本信男 会員	(第4分科)	平成22年9月13日	享年85歳



シンボルマークの由来

『古事記』において「長鳴鳥(ながなきどり)」は、知恵の神である思金神(おもいかね)が天の岩屋戸を開くために鳴かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。本院の恩賜賞(当時)と帝国学士院賞(現日本学士院賞)の賞牌をデザインした坪井正五郎会員は、長鳴鳥に自然界の物の性質を考え究め事に応じて用いるとの意を込め図案に用いました。それ故、本院では長鳴鳥をシンボルマークとしています。

編集後記

今回発行しました第6号のニュースレターでは、今年第100回を迎えた授賞式のほか、公開講演会や日韓学術フォーラムの様子などをお伝えします。ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

取り分け第100回の授賞式については、例年に比べ多くの来賓をお迎えすることができ、会員の先生方の多くは議場最後尾の補助椅子にお座りいただきました。(恐縮しました。)

記念事業の一環として製作した記念誌やDVDも式典までに間に合い、無事お配りすることができました。

式典終了後のパーティーも、コメンテーターからの様々なエピソードの紹介により、多くの方に最後まで楽しんでいただくなど非常に盛会でした。

また、上野郵便局に出店をお願いしましたが、記念切手の売れ行きも好調だったそうです。

授賞100周年の記念事業としては、式典のほかにも展示会や資料集の発行がありますので、引き続き会員のご指導の下努力していくつもりです。

さて、今年の夏は、猛暑と言いますか酷暑と言いますか非常に暑い夏でした。熱中症でお亡くなりになった方も多かったと聞きます。上野駅の改札から本院に至るまでの短い道のりは、朝からジリジリと照りつけられ、本院に到着する頃には汗びっしょりになりました。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、その短い道のりの途中、東京都の公園事務所の前がスカイツリーのほぼ全景が見えるビューポイントになっています。毎日少しずつ伸びていくスカイツリーの様子が観察できます。

我が国の景気もスカイツリーのように少しずつでも伸びてくれると良いのです。

(A)

◎お問い合わせ先

日本学士院

〒110-0007
東京都台東区上野公園7-32
電話: (03)3822-2101
FAX: (03)3822-2105
E-mail: jimujapan-acad.go.jp

第6号: 発行日: 2010. 10. 1
(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>